

## 第一章 仏法の大海には信を以て能入と為す

このたび初めて御参加遊ばした方や、また再三もうお別時にお加わりになった方もおられますが、今日はやはり初めておいで下さった方にお分かりになるようにお話したいと思えます。でありますから、たびたびもう御参加になつた方はどうか随喜してお聞きを願ひとうございます。

昔から申します通り「仏法大海ノ以レ信ヲ為シ能ク入ル」ト 仏法を大きな海に譬えまして、「能入」と申しますと「入らせるもの」ということであります。「仏法の大海に入らせるものは信仰心である」という意味であります。初めは私共の経験以外の事でありますから信ずるよりほかありません。この五感世界の事でありますと、信ずるも信じないもありません、目前の事実でありますから、直ちに経験する事ができ、信ずる事ができます。けれども仏法は初めは私共の経験する事のできる以外の事でありますから、信ずるよりほか道ありません。

## 一五 眼

仏教に五眼ということを説いております。もつとも眼と申しましても、耳も鼻もその他の五官を悉く含んでいます。けれどもただ、しばらくその中の眼をもつて代表して申すのであります。お釈迦様という方は、この五つ通りの眼をお具えになつておられたと伝えられております。私共もまたそう信じております。また私共が現代の釈尊と仰いでおります弁栄聖者も事実この五つ通りの眼をお具えになつておられました。けれども弁栄聖者御自身自分はこの通り五眼を具えているぞとおっしゃったこと一度もありませんでした。しかし、私共を御済度下さいます御実力と御態度が、実に現代の釈尊といわざるを得ないのであります。二千年五百年前お亡くなりになつた釈尊をこの肉の眼で見奉つたならば、弁栄聖者と寸分違わなかつたであろうと信じられます。弁栄聖者は、実に豊かに五眼を具えておいでになりました。

五眼と申しますと肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼の五つ通りの眼のことです。そういったしますと肉眼、天眼という二つの眼は何を見る眼か、何を対象とする眼かということをお話したいとさせていただきます。

肉眼、天眼と申しますと、これは自然界を対象とするものであります。自然界を経験する眼が肉眼、天眼であります。自然界と申しますと、変化のある世界、生まれる事、死ぬ事のある世界を申します。すなわち、私共の日常経験しているこの世界の事です。この世界は何を見ましても、生まれる事、死ぬ事のある、すなわち変化のあるものでありますから、これは生き通しの世界の反対の生死界であります。いわゆる娑婆の世界であります。どうも徹底的な満足を得られない、いつかしたら冷たいものと変わってまいります。学問

でありまして、だいぶ物事が分かり始めた、もう少し学問したいと思ひましても、もはや何もかも捨てて死ななくてはならない時がやつて来る。お金でありましても山のようにお金を貯めましても、もう何もかも捨てて死ななくてはならない時がきつとやつて来る。自分の建てた家だなどといって威張つていても、いつかは墓の主となつてしまう時がきつとやつて来る、というように娑婆ではどうもこの死ぬという事があるばかりに徹底的の満足が得られません。いつか知らぬ間に冷たいものと變つてまいります。「娑婆」と申しますと、一般に言われる言葉でありますが、お浄土の反対、極楽の反対の世界であります。

肉眼、天眼と申しますと、この自然界を対象として經驗する感覺器官であります。慧眼、法眼、仏眼と申しますと、何を対象とするかと申しますと、いわゆる心霊界であります。いわゆる涅槃界であります。生死の正反対であります。生き通しの生命の世界は、生死界の正反対であります。心霊界、すなわちお浄土であります。つまり、五眼があるという事は、言葉をかえて申しますと、私共の対象に二種あるという事があります。また言いかえれば、我々の認識する事のできる世界は、自然界と心霊界との二種あるという事があります。しかし自然界と心霊界とは、何もそのような処が別々にあるという訳ではありません。

心霊界というのはお浄土でありますが、何も十万億土隔てた遠方という訳ではありません。かと申して、高い処に行かねば心霊界と名付けられる世界がないという訳でもありません。この慧眼、法眼、仏眼という眼が開ければ、此処こゝがすなわち心霊界であります。此処がすなわち生き通しの生命の世界、極楽世界であります。しかし肉眼、天眼によつて見得らるる世界は自然界であつて、変化極まりない世界、四苦八苦というようないろいろな苦痛のある、不完全という事のどつさりある世界であります。要するに肉眼、天眼がなけ

れば自然界というものはありません。自然界があつても見えません。ですから、ないも同様であります。それと同じように慧眼、法眼、仏眼が開けなければ、お浄土も見えませんが、ないも同様であります。この五つ通りの眼が開けなければ、私共は宇宙全体を見る事ができません。肉眼、天眼が開けておつても、大宇宙の一部分しか見る事ができません。慧眼、法眼、仏眼が開ければ、私共は大宇宙全体を見る事ができるという、こういう訳であります。でありますから肉眼、天眼だけ開けている人は、いわゆる担板漢であります。宇宙の一面、すなわち自然界だけしか見ることができません。ですから担板漢であります。

担板漢と申しますと、板を担かかつた野郎という事です。昔支那の刑罰で悪い事をいたしますと、首に板を持ってまいりまして、首が入るだけの穴を抉きつた二枚の板で首を挟かみ鎚づで止めてあるものであります。板の一面しか見る事ができません。裏側を見る事ができません。ちょうどそのように肉眼、天眼だけ開けている人は担板漢であります。宇宙全体を見ることができません。野郎などという言葉を用いて失礼な事でございますが、これは禅宗でよく用いる言葉であります。宇宙のほんの一面しか見ることのできない者のことを担板漢と申します。肉眼、天眼ばかりでなく慧眼、法眼、仏眼の眼が悉く開けて初めて宇宙一切のありとあらゆるものを見る事ができるという訳であります。要するに宇宙には、心靈界と自然界の二つの世界があります。しかし処が別にあるという訳ではありません。肉眼、天眼をもって見らるる世界を自然界と名付け、慧眼、法眼、仏眼開けて見得らるる世界が心靈界、すなわちお浄土であります。決して遠方ではありません。譬えて申しますと、私共眼がありますから色、形の世界を見る事ができます。耳がありますから、音響の世界を経験する事ができます。鼻がありますから香りの世界を経験する事ができるのであります。けれ

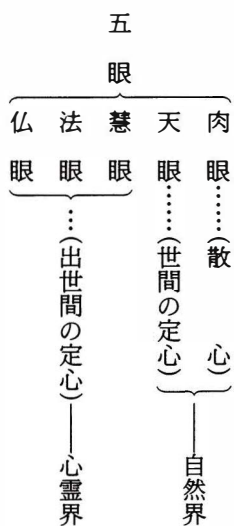
ども、もし生まれながらにして盲人であつては、その人にとつては色、形の世界はありません。けれども、その人でもいい治療を受けますと、眼が見えるようになります。その色、形の世界はすなわち此処であります。決して遠方ではありません。此処であります。

お浄土というのも、娑婆を離れた遠方ではありません。此処であります。このように慧眼、法眼、仏眼という眼開ければ此処がすなわちお浄土であります。でありますから経文の中にも「去此不遠」と言つております。『観無量寿經』という経文にお浄土、すなわち心霊界は此処を去る事遠からず、とお説き遊ばされてあります。「しかしそんな事をいうけれども、お浄土とは十萬億土というではないか」という方もございませんともかぎりません。

土と言いますと一つの太陽系といったようなものであります。太陽系とは地球、水星、火星、木星、土星、金星、天王星、海王星を含みます。その太陽系を一つの土としまして一つ二つ三つというように十萬億の太陽系を隔てて彼方にお浄土があるというように、今「経文の中に極楽世界は遠方だと説いてあるではないか、それはどういう訳だ」というような問題もよく起こります。それはお浄土は此処から十萬億土の遠方にあるとお説き遊ばしてありますが、それはその当時のインドでは誰も西の方に理想郷、すなわちユートピアがあると、そのように信じておつたからであります。その理想郷をインドでは何人も一般に「須摩提」と名付けていた訳であります。西の方に、実に理想の世界があつて、それを理想として憧憬の的となつていたのであります。

それでお釈迦様はお浄土の事をお説きになろうとして、インド人が信じておつた通りをお壊しにならずに

「お前達の言う通り西の方に結構なお浄土があるぞ。遠方にお浄土があるぞ」と、その当時のインド人の考えた信仰をぶち壊す必要はありませんから「その通り、その通り、お前達の理想郷としてのお浄土が西の方にある」とお説き遊ばしたのであります。しかるにインド人は西方に理想郷があると信じておりましたが、そこへ行くべき方法を知りませんでした。それを釈尊がお教え下さいました。その釈尊の御教えに従って一心に修行しますとその理想郷に到達する事ができます。到達して見ますと「お浄土は遠方ではなかった。ウン此処であつた」と信じられる訳であります。そこへ行って、初めてその本當の事に気が付きます。お浄土に行かない人に初めから真実を知らせようとすると、事面倒でございます。ですから、分からない者に対して話す必要のない所は、そのまま壊す必要ありませんから、その通り、その通りとお説き遊ばしたのであります。実に慧眼、法眼、仏眼開ければお浄土は此処であります。遠方ではありません。釈尊はこの五つ通りの眼を円まかに具えていらつしやいました。すなわち宇宙の一切の方面を御覧遊ばしておいでになつたという訳であります。また私共の恩師弁栄聖者も五眼を豊かにお具えになつておいでになりました。



要するに五眼があるということは、私共の対象には二種あるという事であります。また言葉をかえて申し

ますと、私共の認識する事のできる世界は二種あるという事であり、すなわち、自然界と心霊界との二種あるという事になります。

このように、心霊界の事は私共は直接経験する事できません。でありますから、初めは仏法を信ずるよりほか、道はありません。

## 二 信仰の三種

信仰に三種あると申します。仰信・解信・証信であります。仰信と申しますと、聞信と昔から申しております。善知識の説法を承つて、本もとの親様であります如来様の在ます事に、何の疑いもなく、そうでございますかと、そのままそっくり信じられるのが聞信であります。

解信と申しますと、思惟の事であります。聞いただけではなかなか信じられない。大いに思惟し、いろいろの書物を読みますとかして大いに研究して、理屈の上からどうしても如来様という方が在ますという事が理屈の上から信じられてまいりまして、信仰ができるようになったのが解信であります。でありますから理性の満足した所であります。もつとも仰信でありまして、考えるという事がまるつきりない訳ではありません。けれども解信と比較しまして仰信の方が考える事が少ないのであります。しかしこれは理性の信仰であります。理性の満足したところであります。もちろん宗教は感情にあるのであります。感情が単独で起こることはありません。やはり理性が根底であります。

理性でありまして、信仰が得られてまいりますと、何とかしてそういう本もとの親様であります如来様

が在ますならば、お会い申したいと思つて修行する事ができるようになってまいります。一心に南無阿弥陀仏と申しますようになりますと、如来様に事実お会い申す事ができて、もう今度は、理屈でなく事実上、如来様の在ます事が信じられるようになってまいります。こうなりました信仰を証信（修信）と申します。証と申しますのはサンスクリットの翻訳でありまして、事実上の認識のことでありまして、「仰信も解信も得られないものが、どうしてお念仏できるものか」と言われる方があるかも知れませんが、かまわず他の方と一緒にお念仏申すのがよいのであります。修行というものは不思議なものでありまして、皆様と一緒にお念仏申しておりますうちに、仰信なり解信なりが得られてまいります。その実例も少なくありません。

西洋では、人を雇います時にまず一番最初に「あなたはどこの教会に行つておりますか」と聞きます。その時「私はどこの教会にも行つておりません」と申しますと、もう駄目であります。雇つてくれません。でありますから、信仰心はなくともパンの問題の解決するために皆どこかの教会に参ります。教会に参りますと、皆頭を下げて手を額の所にやつて礼拝いたします。また讚美歌も皆と一緒に歌います。けれども信仰心があつてやる訳ではありません。ただパンの問題を解決するためにやるのであります。けれども不思議な事に、そうして礼拝し、讚美歌を歌つておりますうちに、本当の信仰心が起こつてまいります。たとえその人の一生のうちには遂に信仰心が起こりませんが、子の代、あるいは孫の代に深い信仰心をもつた子供が生まれます。そのように信仰心はなくとも、皆と一緒に話を聞き、お念仏しておりますうちに、不思議に仰信、解信が得られてまいります。

こうしてこのたびお別時に参加する事ができましたのも、実に如来様の大慈悲のお蔭であります。この五



日間の日数はたとえ少なくとも、一心にお念仏して、未だお光明が頂けていないお方は、ぜひとも如来様のお光明をしつかりと心に頂きますように、またもうお光明中に日暮らししておられる方は、もつともつとお育てを頂きとうございますという願いをもつて修行するようにいたしとうございます。でありませんと百日お念仏しましても、何の効果もありません。どうかこの五日間を無駄に過ぎないようにいたしとうございます。